

『ガリヴァ旅行記』における 「日本人」のイメージについて

山内 暁彦

序

ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) の『ガリヴァ旅行記』 *Gulliver's Travels* (1726) において、ガリヴァは数多くの未知の国々を訪れるが、彼の渡航先に「日本」が入っていることは、我々日本人にもあまり知られていないようである。ガリヴァは、小人国リリパットや巨人国ブロブディンナグ、飛び島ラピュタやフウイヌムの国の他に我が国をも訪問しているのである。「日本」は第3篇のタイトルに明記されている。それは、“A Voyage to Laputa, Balnibarbi, Luggnagg, Glubbudrib and Japan” というものである。ガリヴァは、ラピュタやラグナグといった未知の国々を巡った後で、日本へも足を延ばすのだということが、タイトルによって読者に早くも知らされるのである。

本論では、『ガリヴァ旅行記』において我が「日本」と我々「日本人」とがどのように扱われているかを検討し、「日本」という表象に込められた意義を考察して行くことにする。その際、作品が執筆された当時の英国ないしヨーロッパから見た日本が、どのようなものであったのか、モンタヌスやケンペル等の著作を参照しつつ、考える。その際、現実の国としての日本と、それとは別個に作品の内部にのみ存在する象徴としての日本を区別する必要があるであろう。そして、我々読者が『ガリヴァ旅行記』という作品で「日本」に出会う事から、作品に対して親近感を持つと同時に、何とも言えない違和感を持つことの理由を考察したい。

I

まず、本論で扱う「読者」とはいかなる種類の読者を指すかを明らかにしておこう。周知のように『ガリヴァ旅行記』は、18世紀初頭の英語圏の住人を直接の対象として書かれたものである。そしてその後、版を重ねたり、子供向け

に書き替えられたり、多くの翻訳がなされたりしたこと等によって、極端な言い方をすれば、全世界に新たな読者を獲得して行き、今日に至ったというものである。そして、その中に現在の我々日本人の読者も含まれると言えるのである。以上のような経緯を踏まえれば、極めて便宜的にはあるが、本作品の読者を以下のように3種類に分類することができるだろう。(1)作品出版当時の英国の読者。(2)作品出版から現在に至るまでの世界各国の読者。(3)現代の日本の読者。本論では(1)と(3)を問題にすることとし、あまりにも多種多様すぎるという理由で、(2)は始めから除外しておくことにする。

では、まず出版当時の英国の読者は、作中の「日本」の表象をどのように読み取ったのであろうか。おそらく『ガリヴァ旅行記』第3篇の構成がこのことを考える手掛かりになるであろう。ガリヴァは、第3篇の結末近くに、すなわち英国へ戻る直前に、日本を訪れるのであるが、実は同篇の冒頭にも異なる形で「日本」が表われていることに注目したい。それは、ガリヴァたちの船を襲う2隻の海賊船の船長が日本人だということである。いわば、この海賊船がミニ日本であるのだ。第3篇の始めと終わりに、ちょうど樺のように出てくるのが日本ないし日本人であるということになる。ラピュタを始めとする架空の国々と英国とを隔てつつ、橋渡しをもする国であり、現実には存在していることは承知していても遥か極東の不思議の国である日本、という構図は、誰の目にも明らかではないだろうか。英国を中心に配した世界地図では、ほとんど世界の東の果てに描かれた日本は、更にそこから東方にあるラピュタ等へと地理的な連なりを構成するには格好の位置にある。否、正しく言えば、このことを計算して作者スウィフトは、日本以東の各国の地理的な配列を設定したに違いないのである。当時の読者は、作品で描かれた日本を、既知の世界と未知の世界との、あるいは、現実の世界と架空の世界との、微妙な橋渡しという意味において捉えていたに相違ないのである。

それでは、現在の日本の読者にとって『ガリヴァ旅行記』に描かれた「日本」の持つ意味はどのようなものだろうか。もちろん、上述の、当時の読者と同じような見解を持つことは当然であろう。ただし、単なる橋渡しというだけの意味を見出だして満足するという訳にはいかない。何らかの重要性を無意識に求めたくなるのではないだろうか。なにしろ我々は当の日本人であるからだ。だが、作品には日本自体の事柄はあまり詳しく書かれていない。「江戸から長崎へ行ったはずなのに、なぜガリヴァは東海道五十三次のことを何も書いていないのか」とか、「ガリヴァの来日した1709年は、赤穂浪士の討ち入りがあった元禄15年(1702年)からあまり経っていないのに、なぜガリヴァはそれに一言も触

れていないのか」とか「生類憐れみの令という世界的にも珍しい法令は、さぞガリヴァの（というよりむしろスウィフトの）関心を引いたはずなのに、なぜこれも言及されていないのか」などといった不満の声が色々と聞こえて来そうである。だが、これらは無理な注文というものではないだろうか。そもそも作者スウィフトの意図は、日本という国の地理や歴史を学問的に紹介することではない。また、日本を舞台にして新たな諷刺を展開し始めることでもない。第3篇の結末でガリヴァを英国に帰らせる方便として、ナンガサク（長崎）から出るオランダ船を利用したかったに過ぎないのである。スウィフトは21世紀の日本人読者のことなど念頭にはないのだ。以上のような状況から、現代の日本の読者が持つ違和感が、かなりの程度まで説明できるのではないだろうか。日本を舞台にしてくれてあることは嬉しいが、扱いがどうも素っ気無いものを感じられ、何か裏切られたような不快感を生ずるといようなことである。我々現代の日本人読者の反応はかなり複雑なものにならざるを得ないのだということになる。

II

読者(1)（当時の英国の読者）と読者(3)（現代の日本の読者）とで、作品に対する反応にかなりの差が生じ得ることが以上でおおよそ明らかとなったと思われる。では、当時の英国の読者にとって、「日本」には単なる橋渡しとしての意味しかなかったのかどうか、更に考えてみたい。先に、スウィフトの意図は、日本を舞台にしてそこで新たな諷刺を展開し始めることではない、と述べたが、諷刺そのものは日本を扱った箇所でも遂行されている。それは、絵踏みの話題を巡って展開される、オランダないしオランダ人に対する諷刺である。これは第3篇の冒頭から受け継がれているテーマである。英国と同じ新教国でありながら、17世紀から18世紀にかけてのオランダは、海上貿易の分野で英国と激しい競争を繰り広げていたことは周知の事実である。貿易の競争が激化すれば、砲火を交える戦争にも至る。そうした時代背景を考え合わせれば、現代の感覚では理解し難い程に、オランダ人が悪し様に取り扱われていることも、ある程度理解することができるだろう。第3篇の冒頭では、海賊船の一味で率先してガリヴァらを傷つけようとするオランダ人に対して、異教徒でありながら寛大さを示す日本人船長が配され、オランダ人の残酷さが引き立てられるという図式になっている。ガリヴァは次のように述べている。

I made the Captain a very low Bow, and then turning to the *Dutchman*, said, I was sorry to find more Mercy in a Heathen, than in a Brother Christian. But I had soon Reason to repent those foolish Words; for that malicious Reprobate . . . prevailed so far as to have a Punishment inflicted on me, worse in all human Appearance than Death it self. (155)

(私は船長に低くお辞儀をし、オランダ人に向いて、同胞のキリスト教徒よりも異教徒に慈悲心を見出だすとは残念なことだと述べた。だが、そんな馬鹿な言葉をすぐに後悔することになった。というのは、この極悪人は、..私に罰を加えるように仕向けたのだが、それはどう見ても死そのものよりも酷いものだったからだ。)

また、第3篇の末尾、日本での場面では、絵踏みに関する一連のくだりで、自分達がしたのと同じことをガリヴァにさせようとして失敗しむち打たれるという情けないオランダ人船員が言及されている。全体として、オランダ人はキリスト教徒でありながら、商売のためには平然と踏絵をし、同じキリスト教徒に友愛の気持ちなど全く抱かない極悪非道の輩として、相当激しく諷刺され攻撃されていると見て良いのではないだろうか。それを引き立てるのに用いられているのが、一般には残酷であり且つ執念深いということにされている日本人である、というわけである。

残酷さ、執念深さという特質は、私見によれば、かなり以前から外国人によって日本人に賦与せられて来た特質であり、切腹ハラキリの風習から、第2次大戦中の様々な残虐行為、最近ではニンジャやヤクザといったメディア主導によるイメージの構築に至る、ステレオタイプとも言うべきものであると考えられる。実際に江戸期の日本人が、あるいは江戸期に限らず日本人一般が、そのような特質を持っているか否か、ということは、ひとまず別個の問題とし、ここでは深くは追求しないことにする。本論に関わりの深い所では、とりわけ、アルノルドゥス・モンタヌスが編纂した『日本誌』(『東インド遣日使節紀行』)の記述からこのような印象が得られるのである。この著作の内容の中で最も広く流布しているものは何かと言えば、おそらく雲仙地獄の絵図ではないだろうか。この挿図は、キリシタン達を沸騰する硫黄のただ中に突き落として彼らに棄教を迫る場面を描いたものであり、一見して忘れ難いものである。これは、キリシタン弾圧を扱った歴史書にはしばしば紹介されているものだ。本文には、これ以外にも、キリシタンの迫害と殉教の様子が事細かに記述され、読む者を

圧倒する。モンタヌスがどの程度史実に忠実であるかどうかは別にして、『日本誌』を一読すれば、日本人の持つ残酷さはかなり強烈に印象付けられるはずである。

では、一方の執念深さあるいは疑い深さという特質は、モンタヌスの著作のどこから得られるのであろうか。それは、オランダ船ブレスケンス号が暴風のため日本の海岸に漂着した後に、船長シャープらが体験した役人の取り調べを扱った、本書の第2部に相当する部分（『日本帝国紀事後記』）の記述からである。お前たちは本当にオランダ人であるのか、日本近海に現われた目的は何か、ポルトガル人僧侶を伴っていたのではないかと、というような質問が、再三再四、執拗に繰り返される。ある時は取り調べは長時間にも及ぶかと思えば、ある時は待たされた揚句、何も取り調べがなく帰される。執拗な追究は数カ月に及び、異境にあって誰も助ける者はない。通訳は頼りにならず、常に疑いの目で見られ、恐怖に震える日々が永遠に続くかと思われる程である。読んでいて、こちらの胸が苦しくなる程である。結局は、オランダ人達は釈放されるが、彼らが赦免の言葉を聞いた時の記述は以下のようである。

It is not to be express'd what an alteration these Words caus'd in them, having from Hour to Hour, and after divers ways, strove as it were with Death, and been a long time doubtful betwixt Hope and Despair: For what could they expect of a barbarous *Japanner*, but a merciless Death? Not knowing but that the Interpreters might interpret false, either out of their own ill nature, or else their ignorance in the *Dutch* Tongue: And the more, because they knew the strictness of the *Japan* Magistrates, who pass the Sentence of Death for the least untruth. (382)

(この言葉が彼らの内にどんな変化を引き起こしたかを言い表すことはできない。四六時中、色々な仕方で、彼らは、いわば死と戦って来たからだ。そして、長い間、希望と絶望の間で迷っていたからだ。野蛮な日本人から無慈悲な死以外の何が期待できただろう。通訳が、性の悪さからか、さもなくばオランダ語に無知であることからか、間違った通訳をしてしまわないとも分からない。さらにその上、ほんの些細な虚偽に対しても死の宣告を下す日本の判官の厳格さを彼らはよく知っていたからである。)

ブレスケンス号の一件に関しても、モンタヌスが事実通りの記述をしているかどうかは定かではないのであるが、日本人の、特に官憲の執念深さは、極めて印象的に描かれているということだけは確かである。残酷さと執念深さを持った、端貌すべからざる日本人、という観念は、モンタヌスによって確実に強化されたといって良いだろう。恐らく当時のかなり多くの英国人は、この著作を英訳の形で読んでいたであろうし、スウィフトもまたこれを読む機会があったに違いない。もちろん、モンタヌスだけではなく、例えば、サルマナザールの偽書『台湾誌』なども『ガリヴァ旅行記』に関して大きな影響があったに相違ないのだが、モンタヌスの右に出るものはないようである。『ガリヴァ旅行記』との関連ということと関係なく単独で取り扱っても、モンタヌスの『日本誌』は非常に興味深い著述であることは間違いない。

日本人は残酷だ、という通念に反して、ガリヴァに自分の食料を与えたりして寛大さを示した海賊船の船長も、執念深いという通念に反して、踏絵をちょっと忘れたということで目こぼしをしてくれた役人も、実は、日本人としては当時の英国の読者が目を見張って驚くような者達だったのではないだろうか。あるいは、そんなはずではない、と大いに疑問を持つような者達だったのではないだろうか。考えてみれば、『ガリヴァ旅行記』の第3篇に描かれた人物にせよ事物にせよ、どれも同じような反応を読者が持たざるを得ないような体のものであったのではないか。驚愕しつつも、ありえない作りごとだということがすぐに明らかになるような分かり易さ、底の浅さが、第3篇には確かに見受けられる。この特質が、しかし、こと日本人に関しては、現在では多少見出し難くなっている、というのが真相ではないだろうか。すると、やはり日本や日本人を扱った箇所は、現実の世界と架空の世界との単なる橋渡しということだけではなく、それなりに意義をも持たされていたということになる。つまりそれは、日本人と対比することによってオランダ人への諷刺を一層強力なものにすることと、日本人というものに関して人々が抱いていた観念を転倒させて読者を驚かすことの2つの点である。

III

ここまでは、残酷さや執念深さといった、日本人の持つマイナスのイメージを取り上げて論じて来たが、我々読者の精神面での均衡を取るべく、以下においては、日本人のイメージのプラスの側面にも着目したい。それは一言で言って、礼儀を重んじる、慎ましい性質を持っている民族であるということだ。こ

れも、先に取り上げた残酷さや執念深さと同様、実際に我々がそうであったか否か、また、そうであるか否か、ということよりはむしろ、長期にわたって徐々に形成されて来た日本人に関するそのような観念自体を問題とするものである。

日本人の礼節や慎ましさを『ガリヴァ旅行記』との関連において論じるのに恰好な素材がある。それは、エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』である。ケンペルは約2年間の長崎滞在中、2度にわたりオランダ商館長らと共に江戸へ参府し、将軍に拝謁した。その道中、彼は、元禄時代の社会や風俗を垣間見る機会を得た。その様子を綴った日誌は、当時を知るための貴重な資料ともなっている。道中日記ばかりでなく、『日本誌』には他にも、日本の地理や社会、自然や医術といったことに関する紹介も、多くの図版入りで述べられており、単なる地理書とも歴史書とも言えない、包括的な博物誌あるいは日本百科とも称すべきものである。今日の我々から見ても興味は尽きないという点では、モンタヌスと同様である。このケンペルの大著を通じて浮かび上がって来る日本人像が、一言で言って、慎ましく礼儀を重んじる国民であるということであるのだ。例えば、ケンペルが将軍綱吉の前でドイツの恋歌を披露した逸話を述べた箇所などを思い起こせば良いだろう。将軍の周りには御簾の影から異国人を窺う多くの女官達がいたのだが、紙片を挟んで少し広げた御簾の隙間から覗いていた、等という記述には、大人しい日本人の女性の姿が代表されてはいしなないだろうか。将軍のいる場では当然のこととは言え、珍しい異国人を前にしても彼女らは決して騒ぎ立てることもなかったのであろう。ケンペル一行が主殿様を訪問した時の記述もこれと同様である。

[W]e were conducted into the innermost and chief apartment, and desired twice to come nearer the lattices on both sides of the room. There were more ladies behind the skreens here, than I think, we had as yet met with in any other place. They desired us very civilly to shew them our cloaths, the captain's arms, rings, tobacco-pipes, and the like, some of which were reach'd them between or under the lattices. (537)

(我々は一番奥の良い部屋に通され、両側にあるかなり幅広い簾の近くに寄るように二度も頼まれた。御簾の後ろには、これまでどこにもいなかったほど大勢の婦人達が座っていた。彼女たちは我々の衣服やカピタンの剣や指輪やパイプなどの品々を見せてくれるように礼儀を忘れずに所望し、そのうちのいくつかの品は簾の間や下から彼女らの手元へと渡った。)

ケンペルによって描かれた日本や日本人に関する全体的な印象としては、残酷さや疑い深さといった暗い部分は、少なくとも表面には浮かび上がっては来ないのである。

ケンペルとスウィフトとの関係を考えてみると、ショイヒツァーによるケンペルの英訳が出版されたのが『ガリヴァ旅行記』が執筆された後の1727年であり、スウィフトがケンペルをこの英訳本で読むことは不可能であった。だが、ケンペルが『ガリヴァ旅行記』の直接のヒントにはなっていないにせよ、仮に、ケンペルの記述によって代表されるような大人しく礼儀正しい日本人像というものが、当時の英国ないしヨーロッパに流布していたとすれば、『ガリヴァ旅行記』において描かれた日本人は、ある程度、それを踏襲したものであるということになるであろう。邪悪なオランダ人と対比的に描かれた、善良とは言えないまでも、真っ当な人間としての日本人。「日本人はヨーロッパ人よりさらにすぐれている、むしろヨーロッパにとっては模範である」という見方は、左程珍しいものではなかったと言うことも可能であるだろう。ヨーゼフ・クライナーによると、こうした見方は、ベルンハルト・ワレーニウスの1649年の著作『日本王国記』にも見いだせる由である。

しかしながら、このような、ヨーロッパ人にとっての模範としての日本人のイメージの用いられ方も、モンタヌスなどに代表される日本人像とはまた別の意味で、『ガリヴァ旅行記』を読む日本の読者にとって心地よいものではない。現実にはヨーロッパ人には彼らの、日本人には日本人の長所短所がそれぞれにあり、どちらが優れているなどということは一概には言えないことを我々は十分承知しているからだ。もっとも読者の中には誉められたからと言って優越感を持つような者がいないとも言えないだろう。だが、理性的な読者であれば、そしてそれが日本的な感覚の持ち主であればなおさら、多少なりとも居心地の悪いような感じを持つのではないだろうか。また、礼儀正しいと言えばそれは褒め言葉であるが、場合によっては慇懃無礼ということもあろう。表面は丁寧な対応をしているかに見えても、本心では良からぬことを思っていたりすることもある。つまりは礼儀正しさに限らずどんな資質にも表と裏があるということである。この小論では、日本人のイメージに限って論じると述べたが、結局は、それにとどまらず、現実に我々がどうであるのかが問題になって来るのである。

結 び

以上考えて来たことから、我々日本の読者が『ガリヴァ旅行記』における日本ないし日本人に関する記述に対して持つ感情は、かなり複雑なものであり得るということが明らかになったと思われる。我々がこの作品に対して親近感と同時に何とも言えない違和感を持つことの原因としては、残酷で執念深いことにせよ、礼儀をわきまえていることにせよ、いずれも類型的なイメージの域を出ないと感じられるということが挙げられるだろう。だが、それだけではない。むしろ、日本あるいは日本人が、諷刺の効果を高めるための手段ないし道具としての役割しか与えられておらず、正面から日本の国や日本人が記述されていないのだということこそが、我々の持つ違和感の最大の理由ではないだろうか。思いがけず日本を取り上げてもらって、確かに何となく有り難いような感じはするものの、実際のところ、日本はいわゆる「刺身のつま」的な扱いであるというのが真相であり、それも片寄ったステレオタイプのイメージを都合良く用いられているに過ぎないのであれば、無い物ねだりであることは重々承知してはいるものの、我々日本人の真の姿を描き出してはいないスウィフトに対する失望は隠せない、といった所ではないだろうか。

更に、以上論じて来たことから、『ガリヴァ旅行記』の特質の一端も明らかになったのではないだろうか。極端な言い方をすれば、それはつまり、諷刺という主たる目的を遂行する際には、その効果を高めるためには諷刺家スウィフトは手段を選ばないということである。残酷さ、執念深さにせよ、礼節を重んじることにせよ、日本人のこうしたプラスイメージとマイナスイメージを利用した第一の理由は、オランダ人に対する諷刺を強力なものにするため以外の何ものでもない。そして確かにスウィフトの意図はかなり見事に達成されていると見て良いと思われる。「日本」や「日本人」が用いられた結果、作品が諷刺としてより質の高いものとなったのであれば、我々としても嬉しく思う、と言う他ないのであるが、いかがなものであろうか。

Works Cited

Kaempfer, Engelbert. Trans. J. G. Scheuchzer. *The History of Japan: Giving an Account of the Ancient and Present State and Government of That Empire; of Its Temples, Palaces, Castles and Other Buildings; of Its Metals, Minerals, Trees, Plants, Animals, Birds and Fishes; etc.* London:

1728.

Montanus, Arnoldus. Trans. John Ogilby. *Atlas Japannensis: Being Remarkable Addresses by Way of Embassy from the East-India Company of the United Provinces, to the Emperor of Japan*. London: 1670.

Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. 1726. Ed. Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1965. Vol. XI of *The Prose Writings of Jonathan Swift*. 16 vols. 1939-68.

クライナー、ヨーゼフ「ケンペルとヨーロッパの日本観」(クライナー編『ケンペルのみた日本』 東京：日本放送出版協会、1996年、29-54頁)。

ケンペル、斎藤信 訳『江戸参府旅行日記』 東京：平凡社、1977年。

モンタヌス、和田萬吉 訳『モンタヌス日本誌』 東京：丙午出版社、1925年。